

古本の楽しみ

最近発行されている本の中にも興味深いものはあるにはあるのだが、いわゆる一般の書店に並べられている本に関しては、正直、がっかりするものの方が多い。単に知識を羅列しただけのもの、世間話の域をでないもの、肝心の要点が書かれていないもの、最初から結論ありきのもの等々が幅をきかせており、本を読んでも考えさせられるものは少なくなっている。それだけ書き手側の人生が薄くなってきたということなのだろう、寂しい限りだ…。

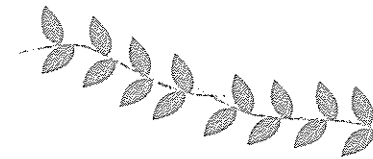
そこへいくと古本屋で出会う本の方が興味深い。紙質こそボロボロで、旧漢字表記等もあったりするが、読み応えのある本が多く考えさせられることが多々ある。そして何よりも自分たちの時代を必死に生きてきたという息吹が行間から感じられて良い。

先日は東京・神田の古書店街で、60年安保時に亡くなられた樺美智子氏の遺稿「友へ 樺美智子の手紙」(1969年発行)を見つけた。手に取って目を通して見ると、樺氏を全く知らない筆者でも、大学生として当然生じたで

あろう疑問、体制への疑問等を正直にぶつけていく姿勢に感銘を受ける。現代の様な予定調和、諦め、追随の時代にはないストレートな思考は、時を経ても色あせないものだと改めて思う。樺氏とは事情が異なるが、やはり若くして亡くなられた高野悦子氏〔「二十歳の原点」(1971年発行)の著者〕のことも思い浮かんできた。高野氏は筆者の母の後輩にあたるということもあり、若い頃、少なからず影響を受けたものであった。

岩波新書なども1960年前後に発行されたものの方が興味深いものが多かった様に思っている。哲学者であった古在由重氏の「思想とはなにか」(1960年発行)なども、その1冊であろう。古在氏は、思想は「思想すること」にこそ意味があるのだとし、考え続けることを促している。そういう意味では、樺氏も高野氏も、道半ばでこの世を去ってはしまったが、現在の私たちよりも考えるという点では重みのある人生を送っていたのかも知れない。

渡辺洋三氏の「法というものの考え方」(1959年発行)にも、興味深い指摘がなされ



社 論

ている。渡辺氏は「資本に支配されている人たちの具体的自由や権利を回復するために、資本の自由や権利を制限するもの」が社会法であり、社会法の代表格が労働法だと述べている。1960年代当時は、社会法という言葉も当たり前のように使われていたと思うのだが、2015年の現在、社会法という言葉は全く耳にすることがなくなった。修正資本主義という言葉すら聞かなくなった。近代以降、労働者が人間として豊かに生活していくためには、国家を法で規制するだけでなく、さらに市民法(契約の自由等々)も規制する必要があると言われ続けてきたはずであったと思うが、果たして何処へ行ってしまったのであろうか? 現在、労働法制の改悪がどんどん進められて来ているが、慣れというもの恐ろしいものだとつくづく思う。このペースでは、戦争が当たり前の時代もすぐやって来てしまうであろう。

そうなる前に、もう一度、近代日本とは何だったのか? 1854年の開国(日米和親条約)の意味は何だったのか? 1945年の敗戦は何

だったのか? 残された歴史書の中へ、古書の旅へと出かけて見てはどうであろうか? 案外、大事なことを忘れてしまっていることに気づかされるかも知れない。

